

文学博士小葉田淳君の「日本鉱山史の研究」に対する授賞審査要旨

明治以前のわが国の鉱山史の研究は、産業史の中でも、その研究が最も遅れた分野であった。それは研究の対象である鉱山が、全国各地に散在し、その多くは今日でも交通不便な山間部に在って、中にはすでに廃坑になったものも少なくなく関係史料の残存もまた少ないこと、つぎにその経営が幕府を始め諸藩や若干の鉱山主などによって行なわれ、その様相関係が多様にして複雑であったこと、並びに採鉱製錬の技術は、一般の歴史研究者の理解困難な科学や特殊技術に関する知識を必要とするが、その方面の技術者には、当面の現実問題に一見縁遠い歴史的研究に関心を抱くものが極めて稀であったことなどによるものと思われる。

小葉田淳君はこの未開拓にして困難な研究に多年取組み、その間北は奥州から南は中国、四国など全国各地の鉱山趾の实地踏査をしばしば試み、各地の公私の図書館所蔵の関係史料を博搜蒐集し、現地に埋もれていた地方関係人や鉱山主などの記録や文書を多く発掘して、これらによって各地の鉱山、特に近世幕藩時代における金銀鉱山の研究を大成したものである。そしてその第一部総説では、まずわが国の鉱山全般にわたり、その沿革から発展、消長と、その採鉱製錬技術の進歩について概観し、ついで第二部各説において各地の鉱山について、これを個別的具体的に考究している。

従来日本の鉱山史の研究は、わが学士院の明治以前の技術史の研究や若干の関係論著など多少あったが、小葉田君は永年の調査研究の成果を踏まえて、上代以来明治前期にわたって、全国の金、銀、銅、鉄などの主要鉱産から、

鉛、錫、石炭やその他の各種の鉱産について、その採取利用の沿革と消長、鉱山の支配、経営や労務関係など各方面にわたって、凡そ鉱山史として触れるべき諸問題について、極めて行届いた実証的な考察を下し、更にそれらの鉱産物の貿易にも及び、広い視野に立って総合的系統的に概説し、次の個別的な研究理解の前提としている。

第二部各説は、本書の主要部分を構成するもので、各地の鉱山について、小葉田君の実地調査と文献的考究と相俟って、具体的にそれぞれその実態の究明に努めたものである。まずその沿革も古くして著名な陸奥の金と対馬の銀について、上代以来中世末期に至る間の採取と利用の変遷について考察し、転じて、中国筋の石見銀山、生野銀山から、甲斐の黒川金山と西八代郡金山、信濃、駿河の金山、特に駿河の安倍金山、越中加賀藩領の虎谷金山や松倉金山及び亀谷銀山、陸奥南部領の白根金山、朴金山、仙台領の抜沢金山、本吉金山、東山金山、その他領内各地の砂金の採取と同藩特有な本判の制度、出羽秋田領の院内銀山、阿仁金山、幕府領の延沢銀山、摂津多田の銀銅山など多くの鉱山について精細に論述している。院内銀山については、鉱夫にキリシタンが多く、生産の減退を懸念して藩庁は一時その追放手入を差控えた事情を明らかにしているなど、主として幕藩時代を対象としているが、その開発の古いものは、それより以前の戦国大名領有時代に溯ってその沿革を究明し、その領有支配機構、経営稼行の諸型態の変遷と採鉱製錬技術の進歩や生産高の増減の事情、並びにその労務組織から鉱山町の発達とその構成などまでも、それぞれその地方の特殊事情に即してその実態を精細に論究している。

なお本書の外、小葉田君はすでに他の諸鉱山に関する論説も種々發表し、中でも九州の金銀山について、「近世初期北九州に於ける金銀鉱山の開発」(経済史研究、一三三—一三二)や「日本鉱業史上に及ぼせる西洋技術に就いて新発見」

(日本歴史、五五)があり、又銅、水銀、硫黄などの採掘や貿易に関する論文も色々ある。しかし幕藩時代の主要金銀山であった佐渡については、古くから先人のまとまった論著も若干あり、小葉田君も再三実地踏査を試みて、その結果は本書の中に随所に採入れて触れているが、その個別的研究の完成は他日に譲ってある。

近世初期から、わが国民の経済生活は急速に發展し、金、銀、銅などの各種貨幣の流通も従ってまた俄かに増大したが、これは全くその背後にこれを支える鉱山業の急速な發達があったからである。小葉田君は永年にわたりたゆまぬ努力と精緻な研究によって、この時代の全国各地における多くの鉱山の發達と經營の実情を体系的に実証し、今後この方面の研究に重要な礎石を据えた許りでなく、広く産業史や經濟史の分野にも多大な貢獻をなしたものである。